

父親における子どもの価値と子どもを持つ負担感

— 日韓比較研究 —

永久 ひさ子・柏木 恵子*・姜 蘭 恵**

Abstract

This cross-cultural study examined the influence of socio-cultural context on the 'value of children' in fathers. 61 Japanese and 55 Korean fathers completed a questionnaire on gender-identity, the 'value of children' and the reason for not having another child.

Regarding the 'value of children,' 'Value for themselves' was higher than the 'Social value' in both countries. In Korea, the 'Condition depending' was higher than that in Japan. The reasons cited for not having another child were 'responsibility on the cost of education' and 'psychological burden.' This was higher in Korea. The result of multiple regression analysis demonstrated that 'Condition depending' was a significant factor for the 'psychological burden' in both countries. 'Social value' was a significant factor for 'responsibility on the cost of education' in Korean fathers. On the other hand, the low efficacy in the role of wage earner was a significant factor for the 'psychological burden' in Japanese fathers.

Key Words : Gender, family, father, cross-cultural study, value of children

Cross-cultural study between Japan-Korea regarding 'Value of children' and 'responsibility of having child' in fathers

*Hisako Nagahisa・Keiko Kashiwagi・**Kang Rang Hye (総神大学)

この研究は、2003年度文京学院共同研究助成費を受けて行った。

Correspondence Address : Faculty of Human Studies, Bunkyo Gakuin University,
1196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-Gun, Saitama 356-8533,
Japan.

Accepted October 27, 2004.

Published December 20, 2004.

〈問題と目的〉

近年日本では少子化が急激に進み社会問題になっている。少子化は先進工業国に共通に見られるが、日本よりも儒教的家族観が強く、子どもの存在を重視する韓国では、近年日本以上に急激な少子化が進んでいる。

子どもを持つことは、親にとって嬉しいことには違いないが、同時に子育てのためのコストが生じる。経済・時間・心理的エネルギーなど、自身の有限の資源を、親は様々な対象に配分して生きている。子どもを持つことで、子育てに配分する資源の必要が生じるが、そのことは、親自身に配分する資源の減少、および既にいる子どもを含めた家族に配分できる資源の減少を意味する。

これまで子どもの価値や子どもを持つ負担感は、母親の個人化の視点から研究され、ジェンダーとの関連から論じられてきた（柏木・永久，1999，永久・柏木，2000）。その中で、母親における子どもの価値には、子どもがいないと老後淋しいなどの「情緒的価値」、子育てで自分が成長する、子どもは生きがいになるなどの「自分のための価値」、姓やお墓を継ぐために必要、次の世代を作るのは人としての務めなどの「社会的価値」という、子どもを持つことへの積極的価値の因子と、経済的ゆとりができたから子どもを持つことにした、自分の生活に区切りが ついたから子どもを持つことにしたなどの「条件依存」、よい保育園があったから子どもを持つことにしたなどの「子育て援助」という、子どもを持つことへの消極的態度の因子が見出された。これらには世代差が見られ、40代では「社会的価値」が有意に低く、「条件依存」が有意に高まっていることが明らかにされた。また、高学歴有職群では「情緒的価値」「自分のための価値」が低くなることが明らかにされた。このことは、母親が職業など子ども以外の対象の中に、生きがいや成長の場を持ち、情緒的サポートのネットワークを広げることで、子どもの価値が相対的に低くなることを意味している。また、子どもの価値は家族の一体感と深い関連があり、積極的価値の因子はいずれも家族の一体感と正の相関関係にあることが明らかにされた。

また、子どもを現数以上に産まない理由は「経済的負担感」「時間的負担感」「心理的負担感」に分けられ、母親役割以外の個人の世界を重視する家族観は、「時間的負担感」と正の相関関係にあることが明らかにされた。

これらの結果は、母親における子どもの価値や負担感が、時間やエネルギーなどの個人的資源を、子育てに使うのか個人としての自分に使うのかという資源配分の問題と密接に関わることを示唆している。子育てを担うのが主に母親である現状から、子どもの価値はジェンダーの問題でもあること、また、世代差や女性の高学歴化有職化に見られるような社会文化的文脈の変化及び社会経済的状況の変化により、影響を受けるものであるといえよう。

しかし、ジェンダー問題のもう一方の側である、父親における子どもの価値、あるいは子どもを持つことの負担感についてはまだ検討されていない。親にとっての子どもの価値や子どもを持つことの負担感をジェンダーに根ざす問題との関連から検討するには、父親を対象に検討することが不可欠であろう。

さらに親にとっての子どもの価値は、社会・経済的状况により異なる。韓国では儒教的家族観が強く、子どもには祖先祭祀や老親扶養、「代を継ぐこと」などが期待され、日本よりも家族を継承する存在としての役割が強く期待されている（本田，2004）。そのため韓国では、女兒よりも男児が望まれ、その対比は1980年代以降女兒100に対して男児102前後である（韓国統計庁，2000）。

同様の状況はかつて日本にも広く見られたが、産業構造の変化により核家族が増え、親自身が経済的に豊かになった今日では、老親扶養規範の弱まり（経済企画庁，1994）など、家族の継承者としての役割は弱まっている。このような家族観の変化を反映し、日本では1970年代以降20年間で男児選好の割合が減少した（厚生省，2000）。日本は産業構造の変化が進んだことで親世代の経済力が上昇し、長寿命化が進んだことで老後の精神的サポートの重要性が高まった。その結果子どもには、経済的価値よりも情緒的価値を期待するようになった。身の回りの世話や精神的ケアは女性に向いているとのジェンダー観と子どもに期待する情緒的価値の上昇が、親の性別選好を、男児選好から女兒選好へと変化させたといえよう。

以上のように、日韓の子どもの性別選好の違いは、親にとっての子どもの価値が、社会・経済的状况により変化することを示している。

また、社会・経済的状况の変化は子どもの価値を変えるだけでなく、親役割、親としての責任の内容も変化させる。韓国では、学問を重視する儒教的価値観と、子どものために親が犠牲になることを美德と捉える伝統的家族観とが結びつき、子どもに高額な教育費をかける親が多い。その結果、子どもの教育費の負担が増大し、家計費に占める教育費の割合は日本を含めた他の国と比較して群を抜いて高い（総務省，2004）。

日本でも、工業化が進み高学歴が必要とされ始め、高学歴が子どもの将来の職業生活を保証すると思われた高度成長期には、過熱気味の教育が問題になった。しかし、今日の40代が子どもを持った1980年代後半はバブル経済の崩壊などの経済環境の変動があり、学歴信仰は薄れ始めた。また、親の個人化が強まり、子どものために親が犠牲になる生き方よりも、親自身の人生を楽しめる生き方がよいとの考え方が強まりつつある。そのような心理的变化を反映し、日本の教育費の家計に占める割合は、韓国のおよそ半分である。

日韓のこのような社会状況の違いは、親が子どもを持つときに、どれほどの教育費を予測するかに違いをもたらすであろう。

ジェンダーは、子どもの価値だけでなく、親の子育ての負担にも深く関わる。日本で行われた父親・母親の育児感情の調査では、育児による制約感は母親の方が有意に強く、子どもを分身と感じる程度は父親が有意に強いことが報告されている（柏木・若松，1994）。この違いが、

「子育ての責任は母親」とのジェンダー観によるものであれば、その裏返しとして、子どもを持つ経済的責任が父親においてより重く受け止められていると予想される。

子ども一人を大学まで進学させる場合、私学か否かで異なるにせよ学費はほぼ一定である。しかし稼ぎ手役割としての責任を果たせるか否か、つまり自分がどれほどの経済的資源を得る責任と能力を持つと考えるかというジェンダーアイデンティティにより、その負担感には個人差があろう。父親としての責任を稼ぎ手役割と捉える場合、教育費の負担感は、父親にとって親役割そのものへの心理的負担感につながる可能性がある。

今日では医学の進歩により、子どもを持つか否か、また何人にするかは、親が様々なことを勘案した上で決めるものになった。子どもを持つか持たないか、何人でやめるかの選択は、親が自身の有限の資源を何に優先的に配分するか、換言すれば自分や子どもにとって何が重要かという価値観をもとになされる。親は子どもを持つ価値と負担感すなわちメリットとコストを勘案した上で、メリットの方が大きければ子どもを持つ選択がなされることが考えられる。しかし、子どもを持つことのメリットとコストをどのようなものとするか、それをどれほど重要と感じるかは、以上述べたように普遍的なものではなく、親の社会文化的文脈に依存する。

日本と韓国は、社会経済的側面では、戦後第一次産業から第二次、第3次産業へと転換し、高学歴化が進んだ点で変化の方向性は類似している。また家族観の面でも、儒教的家族観を持つことや欧米諸国と比べ伝統的性役割観が強いなど類似の文化的背景を持つ。さらに近年では、日韓ともに急激な少子化が進んでいるなど多くの共通点がある。しかし、以下の点は日韓で異なる。学問を重視する儒教的価値観と子どもを家族の後継者とみなす韓国の家族観とが結びつき、韓国では子どもの学歴が子どもと親の将来を保証するとの考えや、子どもの学歴は親の責任との考えが強い。そのため韓国の子どものかかる教育費は家計費支出の4.8%で、日本の2.2%と比較して格段に大きく（本川，2000）、親はそのためにかなりの経済的負担を強いられている。

このように、日本と類似の社会文化的基盤を持ちながら、より伝統的な家族観を持つ韓国と比較することで、父親における子どもの価値と負担感が、社会文化的文脈によりどのように異なるかを検討することができよう。

本研究では、①父親における子どもを持つ負担感が、ジェンダーアイデンティティ及び子どもの価値とどのように関係しているか、②それらは日韓の社会経済的状況や家族観によりどのように異なるかについて検討を行う。

〈方 法〉

調査時期は2003年11月～2004年1月である。日本と韓国の大学生の両親を対象に質問紙調査を行った。日韓ともに大学生を通して両親に配布、回答を依頼し、母親・父親それぞれから個

別に郵送で回収した。調査内容は、自分の能力・関心の方向性を問うジェンダーアイデンティティ16項目、第一子を持つことを決めた理由（子どもの価値）31項目、現在の数以上に子どもを持たなかった理由27項目（いずれも1あてはまらない～4あてはまるで得点化）、及びフェイスシートである。本研究の目的から、一般的ジェンダー観を問うよりも、自分の能力・関心がどのような領域に向いていると考えるかが子どもを持つことの価値や負担感とより関係すると考え、ジェンダー観ではなく、能力・関心の方向性を問うことにした。それらは自分自身の能力や関心の方向性についての自己定義であることから、本研究ではジェンダーアイデンティティと呼ぶことにする。回収率は、日本27%（131人）、韓国55%（328人）であった。本研究では、父親のみを分析対象とした。ただし、因子分析を行う際は回収された全てのサンプルを対象に行う。

〈結 果〉

1 サンプルについて

家族観は、年齢や学歴により差が見られることがこれまでの研究から明らかにされている。そこで、日韓間で年齢の偏りによる違いを少なくするため、45歳以上のサンプルのみを分析対象にした。父親の平均年齢は日本が51.0歳、韓国は50.4歳でほぼ同じである。また学歴構成は日韓ともにやや低学歴が多いが、両国間に学歴構成の大きな違いはない（Table 1）。

Table 1 サンプルの概要

	高卒群	大卒群	合計
日本	35(57.4%)	26(42.6%)	61
韓国	30(54.5%)	25(45.5%)	55
合計	65	51	116

子ども数を比較したところ、2人が日本では50.8%、韓国では58.1%と最も多く、次が3人で、日本は36.5%、韓国は24.2%と、2人と3人で80%以上を占める。日韓ともに同様の人数比率であった。

2 ジェンダーアイデンティティについて

ジェンダーアイデンティティ16項目についてその構造を検討するため、主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った（Table 2）。いずれの因子にも.35以上の負荷を持たない項目を除き、再度分析を行った結果、固有値1以上の解釈可能な2因子が得られた。第1因子は、苦勞しても社会の中でやっという意欲がある、社会の中でやりたいことをやりとげ

るチャンスはある，社会の中でうまくやっていく能力がある，など，社会への関心や能力への自負に負荷が高かったことから，「社会的効力感」と命名した。第II因子は，一番やりがいがあるのは子どもをちゃんと育てることだ，幸せな家庭を作ることが一番の目標，何をするにもまず家族のことが優先だ，など，家庭づくりへの関心，能力，家族への責任を意味する内容への負荷が高いことから，「家族責任」と命名した。信頼性を α 係数から検討したところ，「社会的効力感」.81，「家族責任」.74と十分な値であり，また仮説と一致する因子であったことからこの2因子に確定した。それぞれの因子に負荷の高い項目の素点を合計した後項目数で割ったものをジェンダーアイデンティティ下位尺度得点とした。

Table 2 ジェンダーアイデンティティ因子分析
回転後の因子行列^a

	因子	
	1	2
c11 苦勞してでも社会の中でやっていこうという意欲がある	.728	0.34
c9 社会の中でやりたいことをやりとげるチャンスはある	.721	.059
c8 社会の中でうまくやっていく能力がある	.675	.162
c10 社会から期待される責任を十分に果たしている	.632	.158
c2 社会の中に自分の能力を活かす場がある	.593	-.052
c16 社会のために役立つ活動をしたい	.503	.065
c14 一番やりがいがあるのは子どもをちゃんと育てること	.059	.693
c7 幸せな家庭を作ることが一番の目標	.248	.642
c12 何をするにもまず家族のことが優先だ	.157	.578
c1 一番関心があるのは家族のこと	.022	.572
c13 女性は子育てができなくては一人前ではない	.029	.497
c4 能力が活かされるのは子育てや家の中	-.042	.468

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiserの正規化を伴わないバリマックス法

a. 3回の反復で回転が収束しました。

ジェンダーアイデンティティの平均値を見ると，日本の父親は，「社会的効力感」の方が「家族責任」よりも高いのに対し，韓国の父親は，「家族責任」の方が「社会的効力感」より高かった。また，日韓を比較すると，「社会的効力感」は日本の方が韓国よりも高く，反対に「家族責任」は日本よりも韓国の方が高かった（Table 3）。

Table 3 ジェンダーアイデンティティの日韓比較

	日本	韓国	
社会的効力感	2.81(.56)	2.74(.42)	n.s
家族責任	2.77(.55)	3.11(.39)	***

***p<.001

国別にジェンダーアイデンティティ 2 因子の相関を見た。その結果、日本のみでこれら 2 因子間に有意な正相関関係が見られた ($r = .48$ $p < .001$)。「社会的効力感」は稼ぐ能力への自負と一体である。これが日本で「家族責任」と相関関係にあることは、日本の父親は、家族への主な責任を、より多くの収入を得る稼ぎ手としての責任と認識していると解釈できる。このことは日本の男性のアイデンティティの調査で、性別役割型父親は、育児時間が少なく具体的な育児に関われないため「父親としての自信」が弱い分、「稼ぎ手役割」の遂行によって「父アイデンティティ」を保とうとしている(矢澤・国広・天童, 2004)との指摘と一致する。一方韓国では、これら 2 因子間は独立であることから、家長としての役割など、稼ぎ手役割以外の側面も父親の責任であると考えているものと推測される。

韓国の父親における「家族責任」の認識は、「社会的効力感」よりも強く、また日本よりも有意に高い。韓国の伝統的家族観では、父親は子どもの教育や家計など、実際にそれらに携わるのが母親であっても、その責任は家長である父親が負う。父親の家事時間の内訳を日韓で比較したところ、両国ともに家事時間は少ないものの、韓国の父親は日本より「世話」が多いとの報告(伊藤ら, 2001)があり、ここからも韓国の父親の「家族責任」には、経済的責任以外の世話役割が含まれることが示唆される。また、一般的に男尊女卑の文化を持つといわれる韓国であるが、近年有職の妻が増えていることから、稼ぎ手役割以外の領域にもコミットすることを求められていることが窺える。

3 子どもの価値について

第一子を持つことを決めた理由31項目について、その構造を検討するため主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。いずれの因子にも.35以上の負荷量を持たない項目、および複数の項目に高い負荷量を持つ項目を除き再度分析を行った。その結果、固有値1以上の3因子が抽出された(Table 4)。

第I因子には、経済的ゆとりができたから、仕事が軌道にのったからなど、子育ての条件が整備されたことを理由とする項目に負荷が高かったことから、「条件依存」と命名した。第II因子は、子育てをしてみたかった、子育ては生きがいになるなど、親自身の体験を広げ、生きがいを得るなど、自分の人生をより豊かにすることの価値の項目に負荷が高かったため、「自分のための価値」と命名した。第III因子は、姓やお墓を継ぐのに必要、血のつながった存在がほしいなど、家の継承のために必要との項目に負荷が高かったことから、「社会的価値」と命

Table 4 子どもの価値の因子分析
回転後の因子行列^a

	因子		
	1	2	3
27経済的ゆとりができた	.750	.131	.023
28自分の仕事が軌道にのった	.737	.121	.158
22 2人だけの生活は楽しんだ	.683	-.009	-.005
25友達が子どもを産んだ	.683	-.238	.243
30育児に自信が持てる	.664	.213	.129
15よい保育園があった	.648	-.095	.038
24自分の生活に区切りがついた	.639	-.019	.165
9 住宅事情	.570	.017	.157
31夫婦関係が安定した	.534	.335	.241
23周囲に勧められた	.532	-.197	.283
13自分の能力は子育てで活かされる	.510	.267	.275
26子育てを通して社会と関われる	.480	.231	.242
21子育てを手伝ってくれる人がいた	.472	.005	.099
4 育ててみたい	.005	.737	-.009
3 子育ては生きがい	-.024	.705	.159
7 配偶者がほしい	-.023	.596	.225
16子育てはやりがいのある仕事	.095	.576	.156
6 自分が成長	.100	.564	.114
1 子どもが好きだった	-.059	.529	-.058
10家庭がにぎやか	.120	.512	.315
17夫婦の関係が強まる	.030	.486	.418
19生活に変化が生まれる	.061	.471	.338
2 結婚したらいるのが普通	-.241	.443	.166
14子どもをのみ育てて一人前	.270	.418	.366
20妊娠出産を経験したい	.208	.372	.082
11姓やお墓を継ぐ	.326	-.176	.593
18血の繋がった存在	-.041	.313	.591
12年をとったとき淋しい	.091	.153	.589
29子孫を残したかった	.214	.092	.570
32次の世代を作るのはつとめ	.261	.213	.486
5 年をとったとき安心	.098	.325	.468
33配偶者がほしがった	.240	.211	.450
8 親が楽しみ	.217	.130	.396

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiserの正規化を伴わないバリマックス法

a. 5回の反復で回転が収束しました。

名した。この因子は、第II因子が自分のための価値であったのに対し、「家」や社会など自分以外の人のための価値と解釈することができる。日本の母親のみを対象とした柏木・永久(1999)、永久・柏木(2000)で抽出された因子のうち、「子育て援助」に含まれた項目が「条件

依存」に分類された。また「情緒的価値」に含まれていた項目が「社会的価値」に分類された。これは、本研究のサンプルが父親および韓国サンプルを含むことによるものと思われる。親の老後を子どもが見る老親扶養は日本では弱まりつつあるが、韓国では未だ強く残っている。その違いにより、これまで日本の母親を対象とした研究で情緒的価値に分類されていた「老後子どもがいると安心」「子どもがいないと老後淋しい」などの項目が「姓やお墓を継ぐ存在が必要」などの「社会的価値」に分類されたのであろう。信頼性を検討したところ、 α 係数はそれぞれ、「条件依存」.89「自分のための価値」.84、「社会的価値」.79 と十分な数値であったこと、心理的に解釈可能な因子であることから、この3因子に確定した。先と同様の手続きで尺度得点を算出した。

Table 5 子どもの価値の内部相関（日韓別）

	条件依存	自分のための価値	社会的価値
条件依存		.51***	.58***
自分のための価値			.55***
社会的価値		.53***	

注：右上は日本 左下は韓国 ***p<.001

子どもの価値の内部相関を国別に検討した（Table 5）。両国ともに、「社会的価値」が「自分のための価値」と正相関関係にある。さらに日本は「社会的価値」が「条件依存」とも相関関係にある。

日韓ともに「社会的価値」が「自分のための価値」と相関関係にあることは、日韓の父親が、子どもを持つという社会的責任を果たすことが自分の生きがいや自分の成長につながると考えていることを示している。

どのような子どもの価値が高いのだろうか。また日本と韓国でどのように異なるのかを、次に平均値から見てみよう（Figure 1）

日韓ともに、3種の価値のうち最も高いのは「自分のための価値」であった。また、「自分のための価値」「社会的価値」という積極的価値は2国間に有意差が見られなかった。一方、「条件依存」には有意差が見られ、韓国の方が有意に高かった。また学歴差は見られなかった。

母親における子どもの価値の研究では、世代、学歴、就業の有無の違いにかかわらず、「自分のための価値」は最も高い価値であった（柏木・永久，1999，永久・柏木，2000）。本研究においても同様の結果が見られたことから、父親においても、親の成長や生きがいなど、自分のための価値を最も高く評価しているといえよう。

「条件依存」が韓国で高いのは、小学校から夜遅くまで複数の塾に入れるなど、教育が過熱する韓国では、学校外教育にかかる費用が大きいことによると思われる。また子どもの性別を問わず進学率が高いため、子どもを産む際には経済的条件整備について考慮する傾向が強くなるのであろう。

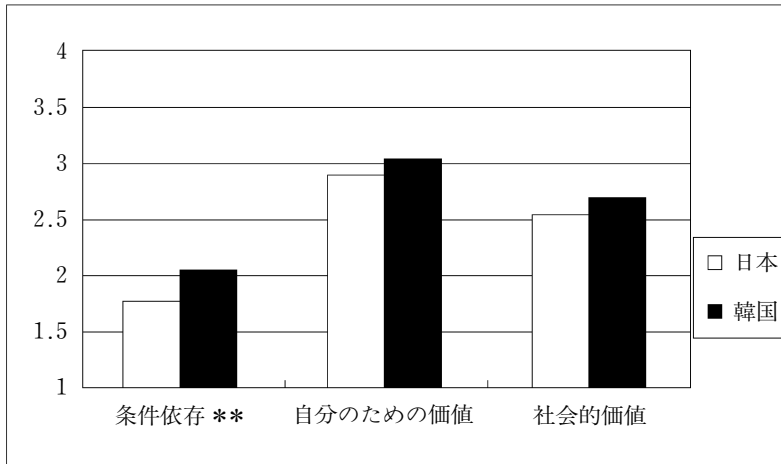


Figure 1 子どもの価値の日韓比較 **p<.01

これまでの研究で明らかにされているように、「条件依存」は条件が整備されなければ子どもは持たなかったという、第一子を持つ際の子どもを持つことへの消極的態度と関わる。次に、現数以上に子どもを持たなかった理由から、子どもを持つことへの消極的態度についてさらに詳しく見ていこう。

4 現数以上に産まない理由について

現在の子どもの数以上に産まなかった理由27項目について、主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った（Table 6）。いずれの因子にも.35以上の因子負荷量を持たない項目を除き再度分析を行った。その結果、固有値1以上の解釈可能な3因子が抽出された。第I因子は、生活のゆとりがなくなる、教育費がかかる、子どもに十分なことをしてやれなくなるなど、教育費の経済的負担に関する項目への負荷が高かったことから、「教育費の負担感」と命名した。第II因子は、育児に自信がない、子どもや子育てが好きではない、旅行や外食に行かれなくなるなど、親役割に起因する、心理的負担感の項目に負荷が高かった。そこで第II因子は「心理的負担感」と命名した。第III因子は、欲しいだけ産んだ、現在の数がちょうどいいなど、現状への満足感を示す項目に負荷が高かったことから、「現状に満足」と命名した。信頼性を見るため α 係数を検討したところ、「教育費の負担感」.84「心理的負担感」.83「現状に満足」.68と十分な値であったこと、心理学的に意味のある内容の因子であったため、この3因子に確定した。親が現在の子どもの数以上に子どもを持たない決断に至る理由は、子どもに十分な教育をしてやれないからなど子どものための配慮と、子育てによる親の心理的負担や生活の制約など親自身の生活への配慮の、2つの側面があると言えよう。先と同様の手続きで尺度得点を算出した。

次に、現数以上に子どもを持たなかった理由3因子について、日韓別にそれらの関連を見てみよう（Table 7）。日韓ともに、「教育費の負担感」は「心理的負担感」「現状に満足」と相関

Table 6 現数以上に子どもを持たなかった理由因子分析
回転後の因子行列^a

	因子		
	1	2	3
b22生活のゆとりがなくなる	.765	.325	.195
b23教育費がかかる	.765	.251	.145
b17子どもが多いと子どもに十分なことをし てやれない	.733	.271	.180
b3 お金がかかる	.672	.253	.227
b18教育や受験が気が重い	.666	.387	.161
b21既にいる子に充分なお金をかけたい	.639	.213	.239
b5 既にいる子に充分な時間をかけたい	.521	.093	.485
b25育児に自信がない	.308	.630	.132
b16子どもや子育てが好きではない	.161	.613	.042
b13旅行や外食に行かれない	.222	.610	.141
b15子育てに家族が協力的でない	.246	.570	-.044
b10気苦労が増える	.441	.538	.137
b14迷っていて時期を逸した	-.045	.522	-.168
b19生まれてくる子の健康が不安	.246	.517	.082
b27保育園など預け先がない	.284	.514	.160
b12夫以外の家族が今のままでいいという	.157	.475	.346
b9 家が狭い	.213	.453	.072
b7 欲しいだけ産んだ	.131	.010	.876
b24現在の数がちょうどいい	.282	-.090	.639
b6 夫がいまのままでいいという	.169	.232	.542

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiserの正規化を伴わないバリマックス法

a. 6回の反復で回転が収束しました。

Table 7 現数以上に子どもを持たない理由 内部相関（日韓別）

	教育費の負担感	心理的負担感	現状に満足
教育費の負担感		.65***	.59***
心理的負担感	.43**		.40**
現状に満足	.50***		

p<.01 *p<.001

注：右上は日本 左下は韓国

関係にある。このことから、「教育費の負担感」が「心理的負担感」「現状に満足」と密接に関連することが示唆される。一方「心理的負担感」は日本でのみ「現状に満足」と相関関係にあった。伝統的家族観が強い韓国では、経済的要因である「教育費の負担感」のみが「現状に満足」と関連する。韓国での子どもの存在は、老親扶養など親自身の問題だけでなく家系や祭祀の継承などにおいて非常に重要であるため、教育費が問題にならない限り子どもを持つことに

は肯定的であると考えられる。一方日本では、教育費の負担感に加え、親の心理的負担感をこれ以上増やしたくないとの思いも、子ども数を現状に留める決断につながるといえよう。

では、これらの因子は子どもを持つことへの消極的態度と関連するのだろうか。前述のように実際の子どもの数は2人ないし3人に集中している。そこで、自分にとっての理想子ども数とどのような関係にあるかを見た。その結果、理想子ども数2人群は3人群に比べ、いずれの尺度得点平均値も有意に高かった（Table 8）。このことから、教育費の負担感だけでなく、子育ての気苦労や子育てによる親の生活の制約などを回避しようとする親役割自体への心理的負担感が強い場合にも、子どもを持つことへの消極的態度は強まるといえよう。

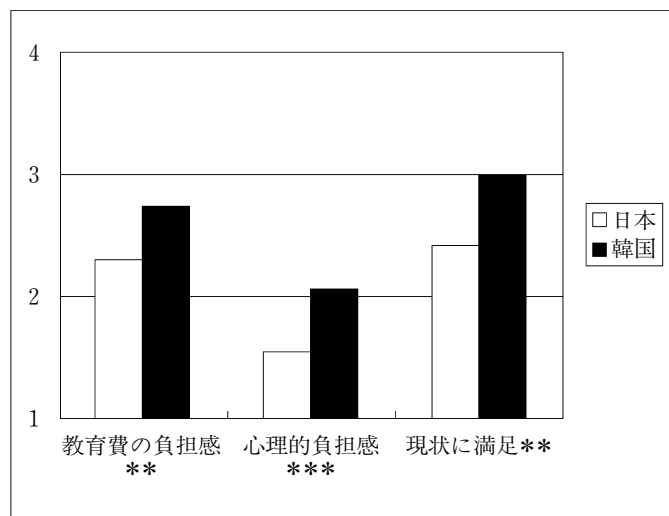
Table 8 現数以上に子どもを持たない理由と理想子ども数

	2人 n=46	3人 n=56	
教育費の負担感	2.76(.58)	2.37(.75)	**
心理的負担感	1.97(.50)	1.67(.53)	*
現状に満足	3.00(.66)	2.52(.88)	**

*p<.05 **p<.01

これらの理由は、日韓でどのように異なるのだろうか。平均値を比較したところ、いずれも韓国の方が高く、とりわけ「心理的負担感」の差が大きかった（Figure 2）。いずれの理由も韓国の方が高いという結果は、韓国の急激な少子化の進行を裏付けるものであろう。

前述のように、韓国の教育熱は非常に高く、塾代を含めた子ども一人当たりの教育費も莫大である。この教育熱の背景には韓国の儒教的家族観があるため、家長である父親にとっては経済的負担のみならず、家族への責任を大きく感じさせ心理的負担を強いることは容易に想像で



p<.01 *p<.001

Figure 2 現数以上に子どもを持たない理由日韓比較

きよう。このように、子どもを親や家族と一体の存在と捉える家族観と韓国の教育事情とが絡み合い、韓国の父親の「教育費の負担感」とともに「心理的負担感」をも高めるのであろう。

高学歴を身につけることが、安定したよりよい就職や出世を確約するのは、高学歴の者が少なく、会社が安定して成長する時代のみ当てはまる。本調査の父親は50歳前後で、韓国では大卒がまだ少数だった世代である（韓国統計庁，2000）。しかも韓国の右上がり経済を経験してきた世代でもあることから、子どもに高学歴をつけてやることの価値を高く認めている世代といえよう。

同様の現象は高度成長期の日本にも見られ、「教育ママ」という言葉が出現したほど親は子どもの進学に熱を入れた。しかし高度成長期を過ぎ、高学歴の者が増え、産業構造が転換した日本では、もはや高学歴は子どもの将来の豊かさや安定の保証ではなくなった。その結果、よりよい大学への合格は親にとって重大な関心事ではあるにせよ、子どもの将来の確約とは考えられない。そのため、親自身が犠牲になってまで子どもに過剰な教育投資を行おうとしないのであろう。

5 現数以上に子どもを持たない理由を規定する要因

現数以上の子どもを持たない理由が、子どもの価値およびジェンダーアイデンティティとどのような関係にあるのかを見てみよう。

Table 9 現数以上に持たない理由と子どもの価値及びジェンダーアイデンティティの相関

	条件依存	自分のため	社会的価値	社会的効力感	家族責任
教育費の負担感	.304**	n.s	.312**	n.s	.289**
心理的負担感	.572***	n.s	.281**	n.s	.243*
現状満足	.342**	.258*	.312**	n.s	.331**

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

「条件依存」「社会的価値」「家族責任」は、現数以上に子どもを持たない理由3次元といずれも正相関関係にあった。「条件依存」と現数以上に持たない理由とが相関関係にあることから、第一子を持つ際に、子どもを持つことによる親の生活の変化を回避・抑制するための条件整備を重視した人ほど、経済的・心理的負担を理由に子ども数を現数に留めることが明らかになった。また、積極的価値のうち「自分のための価値」は負担感とは独立であるが、「社会的価値」は負担感を高めている。子どもを家の継承者と捉えるなど、社会的価値が高いと、子どもの教育への責任が大きくなり、負担感が上昇するものと考えられる。「家族責任」と負担感とがいずれも正の相関関係にあることから、父親が子育てや教育への責任を大きく捉えるほど、より多くの教育費をかけて学歴をつけてやろうと考え、経済的にも心理的にも負担感が大きくなることが示唆される。

ジェンダーアイデンティティ及び子どもの価値が、現数以上に子どもを持たない理由とどの

Table 10 「教育費の負担感」「心理的負担感」を目的変数とする重回帰分析

	教育費の負担感	心理的負担感
条件依存	.31**	.65***
自分のための価値	n.s	-.23*
社会的価値	n.s	n.s
社会的効力感	-.22*	-.30**
家族責任	.34**	.35**
説明率R ²	.19***	.44***

*p<.05 **p<.01 ***p<.001 (値は標準偏回帰係数)

ように関連しているかを検討するため、「教育費の負担感」「心理的負担感」をそれぞれ目的変数、子どもの価値3因子とジェンダーアイデンティティ2因子を説明変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った (Table 10)。

「教育費の負担感」「心理的負担感」ともに、「条件依存」「家族責任」は正の影響を及ぼし、「社会的効力感」は負の影響を及ぼしていた。第一子を持つ際に、親となることを無条件に受け入れるのではなく親自身の生活により多くの資源が配分できる条件整備を重視したこと、つまり、親自身の生活を重視する価値観は、教育費の負担感や心理的負担感を強く感じさせるといえよう。「心理的負担感」の有意な説明変数のうち、「条件依存」はとりわけ大きな値を示している。このことから、親自身の生活を重視する価値観は、子育ての心理的負担感を説明する中心的な変数であることが明らかになった。また、子どもの教育への責任や稼ぎ手役割としての責任など、父親としての「家族責任」の強さは、経済的にも心理的にも負担感を増大させていた。「社会的効力感」が負の値であることから、稼ぎ手としての効力感が低いことは、より負担感を感じさせることが明らかになった。これは、「稼ぎ手としての責任は父親にある」とのジェンダーにより強められる負担感といえよう。

これらの関係は、日韓の家族観により異なることが予測される。そこで、国別に同様の重回帰分析を行った。「教育費の負担感」の有意な説明変数は、日本では「条件依存」(調整済みR²=.10 p<.05 β=.34 p<.05) 韓国では「社会的価値」(調整済みR²=.19 p<.01 β=.45 p<.01)であった。また、「心理的負担感」で有意な説明変数であったのは、日本では、「条件依存」「家族責任」「社会的効力感」であった。このうち「社会的効力感」は負の値である。一方韓国では「条件依存」のみが有意な説明変数であった (Table 11)。

Table 11 「心理的負担感」を目的変数とする重回帰分析

	心理的負担感	
	日本	韓国
条件依存	.54**	.64***
自分のための価値	n.s	n.s
社会的価値	n.s	n.s
社会的効力感	-.37*	n.s
家族責任	.45*	n.s
説明率R ²	.34***	.21*

*p<.05 **p<.01 ***p<.001 (値は標準偏回帰係数)

「教育費の負担感」は、現数以上に子どもがいると十分な資源を配分してやれない、という子どもへの配慮である。韓国では「社会的価値」という、家族や社会からの期待に応えることの価値が、「教育費の負担感」を高めていた。韓国では、子どもの教育に全力を注ぐことこそ、子どもと家族の未来を確実にするとの価値観が強い(ジョ, 1995)ため、家族の後継者を育てる役割を重視する父親ほど、教育を自分の責任と捉えるであろう。それはより多大な教育費をかけることにつながることから、その負担感が高まるものと考えられる。韓国でのみ「社会的価値」が「教育費の負担感」の説明要因となっているのは、このように子どもを家族の後継者と捉える家族観の反映によるものと考えられる。

そのような韓国に対して日本は、韓国より子どもを親とは独立の個人と捉え、学歴は子どもに託す自分の夢の構成要素の一つと位置づけられているという(金, 2002)。日本では第1子を持つ際に親自身の生活を重視したことが有意な説明変数になっていた。このことから、日本の「教育費の負担感」は、教育費が親自身への資源配分を圧迫することへの負担感であると推測できる。

「心理的負担感」は、日本では「条件依存」「社会的効力感」「家庭責任」が有意な説明変数、一方韓国では、「条件依存」のみが有意な説明変数であった(Table11)。日韓ともに「条件依存」が有意な説明変数であることから、親の個人としての生活を重視する価値観は、子どもを持つ心理的負担感を強く感じさせる要因であることが明らかになった。

さらに日本では、「社会的効力感」が有意な負の説明変数であることから、父親の稼ぎ手としての効力感の低さが、「心理的負担感」を強めるといえよう。また「家庭責任」が有意な説明変数であったことから、家族役割が大きい場合にも、「心理的負担感」を強めることが明らかになった。しかし前述のように、日本の父親の「家庭責任」は「社会的効力感」つまり稼ぎ手役割としての責任と密接に関わっていた。このことから日本の父親の心理的負担感は、親の個人としての生活を重視する価値観が強い場合、稼ぎ手役割としての責任が大きい場合、そして稼ぎ手責任への効力感が低い場合に強まることが明らかになった。

6 まとめと今後の課題

本研究では、父親における子どもを持つ負担感が父親のジェンダーアイデンティティ及び子どもの価値とどのように関連するかを、日韓で比較した。

本研究の結果から、日韓の父親の家族責任についての心理的差異について、以下のことが明らかになった。日本では社会的効力感すなわち稼ぎ手としての効力感と家族責任とが相関関係にあり、日本の父親は、稼ぎ手としての責任そのものが家族責任と考えていることが明らかになった。一方韓国ではこれらが独立で、しかも家族責任が日本よりも高いことから、韓国の父親は稼ぎ手としての責任以外にも、家長としての家族への責任など、より広範囲の事柄を父親の家族への責任と捉えていると考えられる。

韓国群の家族への責任の重さは子どもの価値にも関係しており、「自分のための価値」「社会的価値」は日韓間に有意差が見られないが、消極的価値である「条件依存」は韓国の方が高いことが明らかにされた。また、現在の子ども数以上に子どもを持たなかった理由についても明らかな日韓差が見られ、「教育費の負担感」「心理的負担感」「現状に満足」のいずれも韓国の方が有意に高かった。「条件依存」と併せこれらの負担感を韓国の父親が日本以上に感じているという結果は、韓国で日本以上に急激な少子化が進んでいる事実と一致する。

とりわけ「心理的負担感」の日韓差が大きいのは、これは、日韓の父親の家族責任の内容の違いによると思われる。日本は性別分業が強く、父親は稼ぎ手としての役割が家族責任のほとんどで子育ては母親任せであるのに対し、韓国の父親は、稼ぎ手役割の他にも、家長の責任という心理的なコミットメントが大きいことによるのであろう。

「心理的負担感」を目的変数として重回帰分析した結果、日本では「条件依存」「社会的効力感」「家族責任」が有意な説明変数であった。前述のように「社会的効力感」は稼ぎ手としての効力感であり、日本ではそれが「家族責任」と相関関係にあったことから、日本の父親における「心理的負担感」は親自身の生活を重視する故に子どもを持つことに消極的である態度と、稼ぎ手としての責任の大きさ、効力感の弱さによって大きくなるといえよう。

「教育費の負担感」は、韓国では「社会的価値」が有意な説明変数であった。韓国では「社会的価値」つまり家族の後継者としての価値を高く評価する父親ほど、子どもに学歴をつけてやることを親の責任と捉え、結果的に教育費の負担が大きくなるものと解釈された。

本研究では、これまで母親のみを対象に研究されてきた子どもの価値を、父親を対象に検討した。しかしサンプルの数や偏りから、以下の点については検討できず今後の課題として残った。まず、父親の経済的負担をジェンダーの観点から検討する際、妻が有職であるか否かは重要な要因となる。しかし本研究では、妻の就業を考慮できるだけの十分なサンプルが得られず、妻の就業による分析はできなかった。また、父親においては社会的効力感や稼ぎ手役割としての効力感であるため、教育費の負担感や心理的負担感とは負の関係であった。しかし母親における社会的効力感や母親役割以外の生き方としての効力感であるため、子育ての心理的負担感がより大きくなることが予想される。このように、ジェンダーとの関連で検討するためには、

父親と母親の夫婦単位で分析し、その対称性や相補性について検討することが必要であろう。

文 献

- 本田洋 2004 韓国の社会変動と家族—父子関係を支える社会経済的基盤の変化とその影響を中心に—
— 黒柳晴夫・山本正和・若尾祐司編 父親と家族—父性を問う—
韓国統計庁 2000 人口動態年報
韓国統計庁 2001 将来人口推計
柏木恵子・永久ひさ子 1999 女性における子どもの価値—今、なぜ子を産むか— 教育心理学研究
47巻 Pp170-179
柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み
発達心理学研究第5巻第1号 Pp72-83
経済企画庁 1994 国民生活白書
金娟鏡 2002 子育て観の韓日比較「文化としての子育て」日本保育学会第55回大会発表論文集
834-835
金娟鏡 2003 日韓の母親における「子育て観」の因子分析的研究
厚生省 2000 出生動向基本調査
ジョ・ソンスク 1995 家族の子どもの教育 女性韓国社会研究会（編）韓国家族文化の今日と未来
社会文化研究所 Pp165-215
目黒依子 1987 個人化する家族 勁草書房
永久ひさ子・柏木恵子 2000 母親の個人化と子どもの価値—女性の高学歴化、有職化の視点から—
家族心理学研究第14巻第2号 Pp139-150
永久ひさ子・柏木恵子・姜蘭恵 2003 既婚女性における家族観と子どもの価値の日韓比較 文京学
院大学研究紀要Vol.5 No.1 Pp95-118
野々山久也・袖井孝子・篠崎正美 1996 いま家族に何が起きているのか ミネルヴァ書房
落合恵美子 2000 近代家族の曲がり角 角川叢書
総務省統計局 2004 世界の統計2004
山中美由紀 2004 変貌するアジアの家族—比較・文化・ジェンダー— 昭和堂
矢澤澄子・国広陽子・天童睦子 2004 若い父親の「父アイデンティティ」—子育てのジレンマ— 矢
澤澄子・国広陽子・天童睦子編「都市環境と子育て」 勁草書房